

郁達夫の日本論

楊 麗雅

はじめに

郁達夫（1896－1945）に関する研究はほとんど詩と小説を対象としている。彼の優れた文化論と文芸評論の研究はまだ未開拓の地にある。

郁達夫は長く日本留学の体験を持ち、しかも日本語のみでなく、英語、ドイツ語なども堪能で、中、日、独、仏、英、露など、広く世界の様々な国の文学に対する造詣も深い。

本論は、郁達夫の自伝、小説、エッセイに散在する日本論を紹介しながら、その文化論と歴史的、個人的な背景との関連を解明したものである。(1)日本での留学生生活、(2)日本人の国民性、(3)日本の文士の三点に分けて論を進めていく。

一 日本での留学生生活

郁達夫は1913年（大正2年）、十八歳のときに日本に渡り、1922年（大正11年）に帰国するまで日本で九年の歳月を送った。

郁達夫の留学生生活は比較的恵まれたものであった。長兄の郁曼陀は前に日本に留学した経験をもつ人であった。郁達夫はその長兄とともに日本に渡り、兄から精神的にも物質的にも援助を受けた。苦学のすえ、翌年第一高等学校予科⁽¹⁾に一番で合格し、官費留学生となった。その翌年の1915年に長兄の勧めによって、将来医学の路を歩もうと考え、名古屋にある第八高等学校の理科に入った。1919年に東京帝国大学経済学部に入學し、1922年に卒業した。その間、郁達夫は経済学部に着きながら、真に興味をもったのは文学であった。彼は広く日本文学、西洋文学に親しみ、そこから少なからぬ影響を受けた。東京大学在学中の1921年7月に、郭沫若、張資平などと、後に中国新文学において重要な地位を占める文学結社「創造社」を結成した。

官費留学生であったため、酒屋や花柳界に出入りするほど、経済的にも比較的楽

であった。

比較的一路順風を受ける留学生生活を送っていたようにみえる郁達夫は、内面、常に弱小民族としての悲哀と性的苦悶に苛まれていた。郁達夫の日本留学時代はちょうど中国が苦難と屈辱に満ちた時代であった。日本との関係も悪化の一途をたどっていた。1894年に勃発した日清戦争は、日本の勝利で終わった。1904年からの日露戦争は、中国の国土で戦火を交えたものであった。1901年に八ヶ国連軍、1914年に日本軍は、中国山東半島を占拠、翌年の1915年に袁世凱政府に二十一箇条の要求を押しつけた。郁達夫が日本に赴いたのは1913年であったから、二十一箇条の要求の際は日本にいたのである。

郁達夫は日本にいる中国人留学生の境遇を次のように語ったことがある。「知識と見識をもつ中流や上流の日本国民は、中国の留学生に対して、はなはだ籠絡するのだが、しかし、彼らの笑いには刀あり。…知識と見識のない中流や下流になると——これらの連中は当然国民の中の最多数であるが——大和民族は遠慮しないといわんばかりである。それは彼らの態度にも言葉にもそぶりにあからさまに現われている。「お前ら劣等民族ども、亡国の下人ども、お前らを支配しているこの大日本帝国に何しに來たのだ」。(2)

青春期を日本で過ごした郁達夫は幾度も日本の女性に関心と愛慕の念を抱いたことがあった。しかし、多感多情な郁達夫は、自分が中国人であるとわかった日本女性の異様な対応に心を傷つけられたり、中国人の地位の低さを常に意識し、自分が中国人であることを隠したりした。「日本人が中国人を軽視することは、あたかもわれわれが犬や豚を軽視するのと同様である。日本人はみんな中国人を「支那人」と呼ぶ。この三字は日本においてわれわれが人を罵るとき「泥棒」よりも人聞きの悪いもの」(3)である。

郁達夫の日本での境遇を示すいくつかのエピソードをあげよう。

郁達夫が留学初期の名古屋第八高等学校にいた頃、「体操学校」と言われていたほど学校当局が力を注いだ体操の時間は四、五人居た担当者が陸軍歩兵中佐を主任として全員軍人で、内容も純然たる軍事教練ばかりで、体格のきゃしゃな郁達夫は傍目にも気の毒なくらいいじめられていたという。特に某特務曹長の授業では、「ナニヤツトル、留学生!」、「モット胸ヲ張ッテ!」、「タルンドル!」などと事毎に叱責されていた」(4)。

富長蝶如は「服部担風先生雑記」のなかで次の出来事を記している。「彼と二人、本郷三丁目の角のカフェで、何か飲みものをしている。店の中には相当に客が立て込んでがやがやしていた。するとすぐ横のテーブルに、大きな声で何か議論をして調子付いているのが、大学の制服をまじえた六、七人の若い連中。すると、そのう

ちの一人がじろりと郁達夫の顔を流し目に見て、一言「チャンコロ」と言った。ほかの仲間も郁の顔を冷やかに見た。それは明らかに侮蔑に満ちた態度であった。私はすぐ前に座っている彼の顔をちらと見た。彼はじっと飲み物の器の中を見つめたまま、聞かざるがごとき態であったが、しかもその顔面には悲しそうな表情が流れ、その顔色も少し蒼白になった。郁達夫はすぐその店を出たが、その後に「私」に静かな声でこう言った。「ああしたことは、常のことだー」と。」⁽⁵⁾

郁達夫は『偉大な沈黙』⁽⁶⁾の中で次のような出来事を書いている。日本の高等学校にいた頃、学生に対する言動と試験出題などで、たいへん苛酷な古文の先生がいた。学生がみんなその先生のことを大変憎んでいた。授業の中で中国に触れる時のその先生の苛酷さはなおさらひどかった。そのクラスでは郁達夫ひとりだけ中国人であった。彼はその先生の毒舌を聞いて、顔が真っ赤になり、泣き出そうとするのをじっとこらえていた。同じくその先生の話を聞いた五十人ほどのクラスメートは笑うどころか、その先生の軽薄さに軽蔑さえを示した。そのあと、郁達夫は平常通りその授業に通ったが、彼が読む番になると、いつも沈黙をもって反抗した。

郁達夫が東京帝国大学にいた頃、雄弁で有名な衆議院議員の尾崎行雄は留日学生総会の招きで中華留日学生青年会館で講演した。尾崎の名を慕い、千人ぐらいの留学生在が集まった。講演の中で、尾崎は中国の何かの事に言及した際に、中国を諷刺する表現を用いた。尾崎の講演がある段落着いたとき、突然聴衆から若い青年が講壇に上がり、尾崎に質問した。その堂々たる態度、適切な表現及び流暢な日本語は聴衆の長い拍手を博した。尾崎はその場で謝った。この青年は郁達夫であった。⁽⁷⁾

日本留学期における郁達夫の境遇と精神世界は、日本留学を題材とする小説の中にも端的に現われている。

処女作の『銀灰色な死』⁽⁸⁾は異郷の日本で短い生涯を閉じたY君という中国留学生を主人公とした作品である。Y君は、中国に残した妻が死んだ後、いつも通う酒屋の娘の静にひそかに恋心を抱くようになる。Y君と静は互いによく自分の身の上の不幸を語り合う。静は「たいへん優しい心の持ち主で、どんな人に対してもいつも笑いを装う」。「嵐に見舞われた後の舟人がひとり北極の雪世界を漂泊している」ような孤独な生活を送っているY君にとっては、静は精神的柱であった。その静は嫁に行くことになったことを知って、Y君はさらに深い孤独に陥ってしまう。自分のありたけの本を古本屋に売ったお金で静に結婚祝いのプレゼントを買ったあと、Y君は寒い冬の夜に命を断った。

郁達夫の代表作である『沈淪』⁽⁹⁾の中でも孤独な中国留学生が登場して来る。「春の燕や雀のように」はしゃぎ回っている日本人学生の中で、ただひとり憂いの眉を曇らす「彼」はつねに孤独と劣等感に苦しむ。「彼」は自分が「支那人」であるため、

日本人の同級生がみな自分を排斥していると思いながら、憂鬱な日々を送っていた。しかし、心の中では同級生からの慰めをひそかに待ち望んでいた。彼が同級生のだれかがそばにきて、話しかけてくれたらと望んでいたが、彼らはめいめい自らの楽しみに耽け、彼の苦い顔を見ると、ことごとく逃げてしまう。それで、彼はますます同級生達を憎むようになった。

「奴らは日本人だ。おれの敵だ。いつかきつと復讐してやる。絶対仇をとってやるぞ。」悲憤に駆られた彼はいつもこう考えたが、心が平静に戻る時、自分自身を嘲笑し、罵らざるをえなくなった。

「奴らはみんな日本人だ。奴らがお前に同情を寄せないのは当然だ。お前が彼等を恨んだのは、彼らから同情を得ようと思っているからだ。お前のほうこそ、おかしいのではないか。」

「かれ」とうとう苦しみに絶えきれず、異国の海に身を投じた——「祖国よ、祖国！おれの死はお前のせいだ」、
「祖国よ、早く豊かになり、強くなってくれ！」
という叫びを残しながら。

『南遷』⁽¹⁰⁾も留学時代を素材にした作品である。ある日本人の女性に愛を裏切られた挫折から心身とも疲れはてた東京帝国大学の中国人留学生の伊人が療養のため、房総半島に下った。そこで同じく療養に来ていた日本人女子学生に愛慕の念を抱くことになる。伊人の気持ちを察した日本人男子学生が伊人に公然と侮辱的な言葉を浴びせた。その悪意な中傷は伊人の心に新たに燃え始めた日本少女への愛の灯火を消してしまう。作品は、最後に伊人が肺炎にかかり、命のない蠟人形のようになったところで幕を閉じた。

以上の三つの作品はいずれも異国での留学生の悲惨な運命を物語るものであり、日本でエリートコースを辿りながら、内面では孤独と侮辱に堪えなければならなかった作者郁達夫の暗い一面を覗かせたものである。

郁達夫がその留学生活を素材にした作品は、いずれも悲劇である。これは郁達夫が日本で受けた屈辱を背景にある一方、郁達夫自分自身の生い立ちと性格とも関連している。

郁達夫は1896年、中国浙江省富陽城の没落した士大夫の家に四人兄弟の末子として生まれた。三才の時、父親が病死し、兄達との年の差が大きかったため、貧しくて孤独な少年時代を送った。

郁達夫の生まれた年はちょうど日清戦争（1894-1895年）が終わって間もないころであった。『眠れる東の獅』は頭に棒を受け、目が醒めようとしていた。しかし、甘い夢を見ていた間、その内臓が消化不良により、腐りただれて、すでに救いようがなくなった。その症候は全国津々浦々まで広まっている。敗戦後の国民——とくに

この時期に生まれた小国民は、当然のように畸形となり、恐怖症と神経質になってしまう。」⁽¹¹⁾

民族全体の悲劇、父親の不在、兄弟との年の差という個人的要素は、郁達夫の性格における感傷的、孤独的な側面の形成にも大きく影響している。いわば、個人的悲劇と弱小民族の民としての悲劇は郁達夫の日本留学体験を元にした悲劇的な作品を生み出したのである。

二 日本人の国民性

郁達夫の日本留学はちょうど中華民国が誕生して間もなく、中国が国内の混乱と列強からの侵略によって国際的な地位がはなはだ低かった時期であった。中国と対照的に、日本は経済的にも文化的にも繁栄し、社会も安定していた。しかし、物質的生活においては、中国のほうは、地方によっては日本より裕福な側面もあった。

郁達夫は『日本の文化生活』という一文の中で日本での留學生活を次のように回想している。

「どの中国人も同じく、日本に着いた最初の何ヶ月間に、最も苦痛を感じるのは、衣食住の不便である。

部屋は低くて狭い。畳の上で寝なければならない。炬燵の上に置かれた料理は焼き魚か、でなければ、木の板のごとく硬いごぼうである。これは二、三十年前私達が初めて日本で勉強したときの大抵の情景である。大地震以後、都市は西洋化され、建物も当然旧観を換えた。もちろん衣食住も以前と違ってくる。しかし、飲食において過度な浪費をしがちな中国人の眼に映った日本の一般国民の生活は中国人のそれには遥かに及ばない。」⁽¹²⁾

中国で比較的に豊かな江南地方で育った郁達夫が、日本の素質な暮らしに最初に苦痛を感じたのは自然なことであろう。十八才から九年間も日本で暮らした郁達夫が次第にその質素な暮らしに愛着を感じるようになったが、中国が列強の侵略と内乱に喘いでいた時代を生きた郁達夫にとって、日本の最大な魅力はその社会の安定ぶりであった。

日本に長く住むにつれて、「中国社会のどこへ行っても得られない一種の安堵感をもつようになる。それは現実の物質上の苦痛を忘れさせ、精神高揚と心気平和を得られ、知識と視野を広げるための精神食料を懸命に追い求めるようになる」。「日本での滞在年数が三五年以上になると、この島国の粗茶淡飯はいちいち恋しくなる。苦しい生活、秀麗な山水、高揚な精神、整然とした秩序を回想し、日本で過ごした日々はまるで蓬莱島の仙境に身を置いたような感がある。それと比べ、中国の社会

はまさしく乱雑として秩序のないものである。」

「日本の一般的な国民が質素な生活を送っているこそ、すべての民衆は国の奮起に向かって進むことができるのである。明治維新から今までただ七、八十年しか経っておらず、日本の国全体の進歩は日本より千余年も長い文化をもつ英仏独に匹敵できる。憂いの中で生まれ、逸楽の中で死ぬ。これはまさしく中日両国の栄枯盛衰の根元である。

質素と精進は確かに日本一般国民の生活の傾向である。しかし、それは大和民族が野蛮原人のように享楽を知らないことを意味しない。但し、彼等の享楽、文化生活は豪奢を好まず、清淡の中に奇趣が生まれ、簡易の内に深意を寓する。春花秋月、近水遠山、天地自然の氣を得ることが多い。これは、奇山異水の多い日本の地理条件に由来するが、それよりも、島国民族の天性によるところが大きい」⁽¹³⁾。日本の繁栄をもたらしたのは、その質素を貴ぶ国民性であり、中国の衰退を招いたのは豪奢を好む国民性であるという郁達夫の指摘は今日でもなお実を的えたものであり、日中両国の現状を分析するのに示唆的であるといえよう。

最初に苦痛さえ感じた日本の質素な暮らしは後に郁達夫にとって日本の魅力の一つとなり、彼が中国に戻った後に日本での生活を時々懐かしく思い出す。

「ある年、上海で病氣になった時、突然学生時代に日本で食べた朝ご飯の味噌汁の風味を思いだし、病院のコックさんにそれを作ってもらった。何回作っても、その味が出ない。最後に、やっとある日本人の友人から本場の味噌汁をもらった。それを食べた後、食欲が日増しによくなる。これは単に私個人の生活の一端であるに過ぎないが、これによって、日本の質素な生活の魅力を示すことができよう。」

文学において、郁達夫は和歌と俳句を取り上げて次のように論じている。

「古典文学の中で、最も精粹で独特な文学形式は三十一音の和歌である。そのテーマは、男女間の恋情、思婦怨男の哀慕から、国と家の興亡、人生の流転及び、世の無常、風花雪月の魅力などにまで、行き渡るが、単なる清清淡淡の数辞は乾坤今古のあらゆる情感を包括する。後の俳句は、情韻をモットーとし、その字数は和歌よりも少ない—ただの十七音—しかし、そのもつ余韻と余情が空中の柳の波の如く、池の漣のごとく、始まる時知らず、終わること知らず、その短い一句は、橄欖を食べるごとく、かじるほどあと味が出る。」⁽¹⁴⁾

日本の女性の特徴に関しては、次のように述べている。

「日本の女性はしとやかで可愛い。開国以来ずっと男性に従順する教育を受けてきた。しかも以前から人口があまり多くなく、衣飾起居が簡素であったため、一般女性は貞潔を守ることに関しては、中国の女性ほど拘らない。纏足や外の世界と隔離する習慣がまったくないため、労働に従事したり、自由に外に出回ったりして、

男性とまったく同じである。したがって、大抵豊満な体を持ち、けっして（中国女性のように）風にあたったことのない弱々しい柳や黄色の花のように痩せている病貌がない。」⁽¹⁵⁾

三 日本の文士

1 日中戦争における文士の姿勢

日中戦争勃発一年後の1938年に郁達夫は『日本の娼婦と文士』を書き、日本軍国主義を謳歌する文士を叱責した。

「われわれは日本に長く住んだため、平時比較的によく多くの日本の文士と交遊している。彼等はその見識及びふだんの言動、修養、抱負からみると、日本の優秀分子であり、その気骨、判断力、正義感は普通の人より優れていると思われる。しかし、「疾風知勁草」（逆境に置かれてはじめて人の真価を知る）という諺の通り、中日交戦の瀬戸際になって、これらの文士の醜態は暴露されてしまう。」⁽¹⁶⁾

一例として郁達夫は佐藤春夫の書いた映画シナリオ『アジアの子』を挙げている。「この駄作は日本軍の勝利と日本女性の国を愛し、家庭を愛する高尚な人格を讃え、中国人の人格を誹謗するものであるという。

郁達夫と佐藤春夫は個人的には交遊関係を持ち、しかも郁達夫はかつて「日本現代小説家の中で私がもっとも崇拜している作家は佐藤春夫である」と語ったことがあるほど、彼の作風にたいへん傾倒していた⁽¹⁷⁾。

日本の暮らしに愛着をもち、日本文学に親しみ、多くの日本人の友人をもっていた郁達夫は、一方では日本で弱小民族の民としての屈辱と悲哀を味わった。彼の日本の侵略を譴責する数多くの文章には、そういった背景があった。

2 自然主義文学

郁達夫が日本留学中に衝撃を受け、彼の後の自作文学に大きな影響を及ぼしたのは自然主義文学であった。その影響は、特にその初期の小説に顕著に現われている。

郁達夫の初期の作品に対し、二つの否定的な評価があった。一つはそのルーズな文体、もう一つはその露骨な性描写に対してであった。『茫茫たる夜』が世に出たとき、多くの読者からの批判的な手紙が郁達夫のもとに殺到した。その批判は大きく文体と道徳という二つの角度からのものであった。

文体では、『茫茫たる夜』の文体はあまりにもルーズであるため、贅言が多く、読者に与える印象が薄く、読後、茫然として、なにも得るものがないという。日常瑣末なものを克明に描く郁達夫の自然主義文学の作風は当時の中国の文壇には馴染

めないものであった。

道德に関する批評では、文芸は人生に有益なものとなるべきという観点から、郁達夫の露骨な性描写は未熟な青年に大きな害を与えることになるという⁽¹⁸⁾。このような批判に対して、郁達夫は「芸術は人生と関連していることは否めないが、しかし、われわれは創作する際に、まず人生を第一に考えるべきではない」⁽¹⁹⁾と反論している。郁達夫の創造態度は芸術と人生をある程度切り離し考えるべきというロマン主義的な考えにもとづくものである。一方、郁達夫の露骨な自我暴露は現実を理想化せずに、そのありのままの姿を写し取ろうという自然主義の文学理念によるものでもある。

郁達夫は自分自身の創作態度について次のように語ったことがある。「『文学作品はすべて作者の自叙伝である』という言葉は、不変な真理である」⁽²⁰⁾。郁達夫はとくに日本の私小説の代表的作家である葛西善蔵を愛読した。彼の日記には葛西の小説を読んで敬服したと記している⁽²¹⁾。

郁達夫の小説では娼婦が同情すべき人物として登場する場合が多い。郁達夫が花柳界の生活を小説の題材に取り入れたことも当時の否定的な反響を呼んだ一つの要素であった。花柳界の生活を大胆に描き出した郁達夫の小説は当時の中国の新文学においてきわめて異質な存在とみられていた。それに対し、郁達夫は次のように反論している。

「『花柳小説』は昔の中国の小説界で、はなはだ勢力をもっていた。しかし、新小説においては、花柳界の生活を描くものがたいへん少ない。…どうして単に花柳界のみを文学の題材としてはいけないのであろうか。世の中で悪徳を散布するのは単に娼妓のみでない。娼婦よりずっと悪い官僚、軍人どもは横行している。どうしてわれわれは単に娼婦のみを軽蔑するのであろうか」⁽²²⁾。

郁達夫のそのような小説は、彼自身の生活と密接な関係があった。郁達夫は日本留学中、官費留学生であったため、酒屋や花柳界に出入りすることができるほど、経済的に比較的楽であった。当時の中国では、醜悪とみなされていたそのような生活体験を題材にしたのは、花柳界の生活が郁達夫の精神生活にかなり影響を与えたことを物語るものである。また人生の醜悪なところをそのまま再現する自然主義文学の影響でもあると考えられよう。

郁達夫の文章の中に自然主義文学を批判するものもみられる。例えば自伝の中で、日本留学初期に衝撃を受けた様々な思潮の中で「自然主義派の文人の醜悪な暴露論」⁽²³⁾を挙げている。「醜悪」という表現は郁達夫が初めて自然主義文学に接したときに、一種のカルチャーショックを受けたことを暗示するものであろう。その衝撃が薄れるにつれて、郁達夫は次第に自然主義文学の思潮の中に巻き込まれていっ

たことは、その文学作品をみても明らかである。

郁達夫の小説家としての地位が上がるにつれ、彼の作品に対する評価も肯定的なもの、ないし賞賛が多くなる。多くの評論家は彼の作品から社会性を見だし、評価しようとしている。

曾華鵬と范伯群両氏は、『沈淪』の真の意図は「留学生の悲惨な運命を描写することによって、帝国主義の他民族への抑圧に対する憤懣と告訴」をすることであり、『沈淪』の主人公の悲劇は、「偏屈で自棄的な性格による悲劇というより、弱小民族の悲劇である」と評している。しかし、その大胆な性描写と主人公の変態心理については、「筋の発展と人物の形象化には必要であるが、そこに注ぐ筆墨が多すぎるため、作品の思想性の明瞭な顯示にマイナス的な影響を及ぼす」⁽²⁴⁾という。

岡崎俊夫氏は『沈淪』について次のように論じている。

「異国に學ぶ孤獨な青年の性の悶えと弱小民族の悲哀をえがいたもので、今日からみれば、幼稚で、彼の作品としてはあまり上々とはいえない。…人間の本能である性の衝動をあからさまに表わした作品は、魯迅のみならず、文學研究會の作家のものにも見られなかった。これらの作家があえて表わさなかったものを郁達夫は大胆に表出した。しかもそれは単なる性の悶えではなく、弱小民族という意識と結びついているところに意味がある。つまり人間の本然の欲求さえも民族的被壓迫のために抑壓され歪められていることを嘆いているのである。」⁽²⁵⁾

以上の論述の共通点は郁達夫の作品の主人公の悲劇を弱小民族の悲劇と結びつけるところにある。たしかに個人的悲劇と民族全体の悲劇が互いに関連していることは否定できないが、郁達夫の作品の場合は、むしろその個人的悲劇は主調をなしている。郁達夫自身も『沈淪』と『南遷』について次のようにことわっている。「この二つの作品の中には、何箇所か中国留学生に対する日本の国家主義の抑圧に触れている。宣伝小説として見られることを恐れたので、その描写は淡々と文章を綴ったものとなっている」⁽²⁶⁾。

作者はその自序伝の中で示されているように青年の病的心理および魂と肉の衝突を描こうとすることに主眼を置いていたのである。

郁達夫は日本を離れるとき、舟の中で茫々たる夜色に消えていく日本の国土に向かって、心の中で次のように叫んだ。

「日本よ日本！さらば！私は死んでもここへ再び来るまい。私は自国の社会に圧迫され、自殺に追い込まれる時、最後に私の頭に浮かんでくるのはおそらくこの島国だろう。Avé Japon! 私を待っているのは真っ暗な未来のみ！」⁽²⁷⁾。

結 び

日本文化に親しみをもち、日本を通して世界の様々な文学を吸収した郁達夫は、一方、日本で弱小民族としての圧迫と屈辱を受け、最後に日本軍国主義によって命を奪われた。郁達夫の日本に対する憎悪は、近代中国人の日本に対する複雑な感情の縮図である。

郁達夫の日本留学が彼の自作文学に深い影を落とし、彼の日本観を形作った重要な要素であったことは本論によって明らかになったであろう。

郁達夫の日本論は、血と涙の体験に基づいたものである。その新鮮な視点と深い洞察は彼の死後四十七年経った現在においても、日中両国間の文化の摩擦と融合の様相を究明するのに示唆的であるといえよう。

謝 辞

本研究は城西大学学長研究奨励金（1991年度）の助成を受けました。謹んで謝意を表します。

【注】

本論における翻訳はすべて筆者自身によるものである。

1. 東京にある。当校には中国人留学生のために一年コースの特設予科が設けられていた。
2. 「雪の夜——自伝の一章」, 1936年2月1日, (『宇宙風』第11期, 『郁達夫日記集』 p.410)
3. 同上 p.411
4. 『郁達夫——その青春と詩』 p.132
5. 富長蝶如の「服部担風先生雑記」(『郁達夫——その青春と詩』 p.184)
6. 『偉大な沈黙』(『郁達夫散文集』 p.630)
7. 『郁達夫外伝』 p.5
8. 『銀灰色な死』(『時事新報・学燈』1921年7月, 『郁達夫全編』)
9. 『沈淪』, 上海泰東図書局1921年(『郁達夫全編』)
10. 『南遷』1921年7月21日(『郁達夫全編』)
11. 『悲劇の出生』(『人間世』第17期, 1934年1月5日, 『郁達夫日記集』 pp.357-8)
12. 『日本の文化生活』(『郁達夫散文集』 p.264)

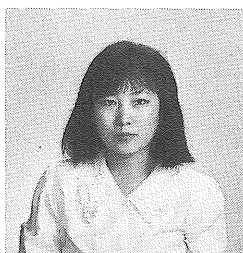
13. 同上
14. 『日本の文化生活』（『郁達夫散文集』 p.265）
15. 「雪の夜——自伝の一章」, 1936年2月1日,（『宇宙風』第11期, 『郁達夫日記集』 p.410）
16. 『日本の娼婦と文士』（『郁達夫文論集』 p.745）
17. 『海上通信』（『郁達夫散文集』 p.59）
18. 『郁達夫研究綜論』第一部分
19. 「『茫々たる夜』を発表した後」（『郁達夫文論集』 p.28-p.31）
20. 『最近五, 六年間の創作生活への回顧』（『郁達夫文論集』 p.335）
21. 『村居日記』1927年1月6日（『郁達夫日記集』 p.39）
22. 「『失敗した』を認めよう」（『郁達夫文論集』 p.111）
23. 「雪の夜——自伝の一章」, 1936年2月1日,（『宇宙風』第11期, 『郁達夫日記集』 p.411）
24. 『郁達夫評伝』 p.44
25. 『日中文学録』 14, p.318
26. 「『沈淪』自序」（『郁達夫文論集』 p.17）
27. 『帰航』（『郁達夫散文集』 p.8）

参考文献

- 『郁達夫日記集』陝西人民出版社, 1984年
『郁達夫全編』 浙江文芸出版社, 1989年
『郁達夫散文集』 浙江文芸出版社, 1985年
『郁達夫文論集』 浙江文芸出版社, 1985年
『郁達夫詩詞集』 浙江文芸出版社, 1988年
『郁達夫海外文集』 生活・読書・新知三聯書店, 1990年
稻葉昭二『郁達夫—その青春と詩』 東方書店, 1982年
蔡震『郭沫若と郁達夫比較論』 陝西師範大学出版社, 1988年
辛憲錫『郁達夫の小説創造』 北京出版社, 1986年
鄒嘯『郁達夫論』 北新書局, 1933年
曾華鵬・范伯群『郁達夫評伝』 百花文芸出版社, 1983年
孫百剛『郁達夫外伝』 浙江人民出版社, 1982年
張恩和『郁達夫作品欣賞』 廣西人民出版社, 1983年
張恩和『郁達夫研究綜論』 天津教育出版社, 1989年

（未完）

楊 麗雅さんの略歴



-
- | | |
|-------------|--|
| 1958年 1月21日 | 中国 湖南省 邵陽市で楊光騰・朱曼萍の長女として生まれる |
| 1970年 7月 | 中国 湖南省 邵陽市 資江小学校卒業 |
| 1973年 7月 | 中国 湖南省 邵陽市 第四中学校卒業 |
| 1976年 7月 | 中国 湖南省 邵陽市 第四高等学校卒業 |
| 1976年 8月 | 中国 湖南省 隆回県の農村に下放される |
| 1976年 9月 | 中国 湖南省 隆回県 五星中学校英語教師 |
| 1981年 7月 | 中国 黒竜江大学 日本語・日本文学学部卒業 |
| 1981年 9月 | 中国 北京大学 東方語系 修士課程 比較文学専攻入学 |
| 1982年10月 | 日本 筑波大学 文芸・言語研究科 研究生（文部省国費留学生） |
| 1983年 4月 | 日本 筑波大学 文芸・言語研究科 博士課程一般文学専攻入学 |
| 1985年 2月22日 | 日本 茨城県つくば市で袁福之と結婚 |
| 1986年 3月 | 前期論文を提出、文学修士の学位を授与される |
| 1989年 7月 | 日本 筑波大学 文芸・言語研究科 文学専攻修了
文学博士の学位を授与される |
| 1989年 7月 | 米国 スタンフォード大学・アジア言語学部 客員研究員 |
| 1990年 4月 | 日本 国士館大学 教養学部 兼任講師 |
| 1990年 4月 | 日本 城西大学 経済学部 教養課程 専任講師 |
| 1991年 4月 | 文部省科学研究費奨励研究（A）「東西文学における俳句の反映
— 中国の漢俳と英米の Haiku を通して —」 |
| 1992年 4月 | 日本 城西国際大学 経営情報部 専任講師 |
| 1992年 5月 7日 | 日本 千葉市で双児 袁敬洋・袁敬雅を出産 |
| 1992年 5月14日 | 日本 千葉市 千葉大学附属病院にて永眠 享年34才 |
-

著書・論文

1. 母国と日本の架け橋として、国際問題討論会「ザ・フォーラム'84」外務大臣賞，1984年
2. 『草枕』論，筑波大学修士論文，1986年
3. 『草枕』の世界とその比喩表現，東方学会誌『東方學』，第75輯，134-144頁，1988年
4. 文学作品における比喩表現の研究―夏目漱石の文学を通して―，筑波大学博士論文，1989年
5. 漱石文学に現われた女性像とその比喩表現，文体論学会誌『文体論研究』第36号，1-13頁，1989年
6. 漱石の小説における比喩表現の特色―詩的技法との関連を通して―，『城西大学研究年報』，第15巻，39-46頁，1991年
7. 中国の古典比喩理論―日本と西洋との比較を通して―，『城西人文研究』，第18巻第2号，19-33頁，1991年
8. Mother and Daughter: The Plural Voices of Cultural Translation in Amy Tan's *The Joy Luck Club* (共著)，『文学研究論集』，第8号，139-167頁，1991年
9. 漱石文学の比喩表現におけるイメージの研究―夢・絵画・幽霊―，『城西人文研究』，第19巻第1号，61-82頁，1991年
10. 『初級中国語―藤原浩の中国遊学』(共著)，白帝社，1991年
11. 夏目漱石の比喩論，『城西人文研究』，第19巻第2号，45-58頁，1992年

口頭発表

1. 『草枕』の世界とその比喩表現，国際東方学会議，1986年
2. 中国の比喩理論，国際東方学会議，1987年
3. 漱石文学の女性像とその比喩表現，日本文体論学会大会，1988年
4. 漱石文学の男性像とその比喩表現，国際東方学会議，1988年

学 会

1. 東方学会
2. 文体論学会
3. 日本近代文学会
4. Modern Language Association of America (U.S.A)

5. Association for Asian Studies (U.S.A)
6. 中国女性史研究会
7. 筑波大学比較・理論文学会

進行中の研究テーマ

1. 夏目漱石の文学作品における比喩表現の特色
2. 西洋の印象派詩人と東洋の詩歌との関連
3. 中国の漢俳、西洋の Haiku と日本の俳句との比較
4. 千代尼の連歌と俳句の英訳本(共著), 1993年米国で出版の予定
5. 近代以降の中国人による日本論に関する研究

(編集者記)

去る1992年5月14日、筑波大学比較・理論文学会の学会員であった楊麗雅さんが急逝されました。楊さんは、夏目漱石の研究を中心として、これからも益々活躍が期待されているところでした。当学会では、生前楊さんとながりの深かったお二人の方に追悼文を書いていただき、また夫である袁福之さんの御協力を得て、楊さんの遺稿の中から未発表の論文を一篇と略歴を掲載することで、哀悼の意を表わすことにしました。ここに謹んで楊さんの御冥福をお祈り申し上げる次第です。

5. Association for Asian Studies (U.S.A)
6. 中国女性史研究会
7. 筑波大学比較・理論文学会

進行中の研究テーマ

1. 夏目漱石の文学作品における比喩表現の特色
2. 西洋の印象派詩人と東洋の詩歌との関連
3. 中国の漢俳、西洋の Haiku と日本の俳句との比較
4. 千代尼の連歌と俳句の英訳本(共著), 1993年米国で出版の予定
5. 近代以降の中国人による日本論に関する研究

(編集者記)

去る1992年5月14日、筑波大学比較・理論文学会の学会員であった楊麗雅さんが急逝されました。楊さんは、夏目漱石の研究を中心として、これからも益々活躍が期待されているところでした。当学会では、生前楊さんとながりの深かったお二人の方に追悼文を書いていただき、また夫である袁福之さんの御協力を得て、楊さんの遺稿の中から未発表の論文を一篇と略歴を掲載することで、哀悼の意を表わすことにしました。ここに謹んで楊さんの御冥福をお祈り申し上げる次第です。